

イザヤ書研究の現在

越後屋 朗

I. はじめに

Richard J. Cliffordは、『Fair Spoken and Persuading』（1984）という第二イザヤ書研究の序論を次のように書き出している。

第二イザヤとは、イザヤ書40－55章の匿名の著者に近代の研究者たちが与えた名前である。彼はこの名前によって、伝統的に1－39章の大半の著者とされている紀元前8世紀後半の「第一」イザヤ、それに大部分の研究者が紀元前6世紀後半あるいは紀元前5世紀初めと判断する56－66章の著者から区別される。40－55章は、半世紀前に自国ユダからバビロンへと連れてこられたユダヤ人たちに対して紀元前540年代と多分それに続く10年間にわたって語られた言葉が集められたものである。¹⁾

これは、今日までのイザヤ書研究に大きな影響を与えてきた仮説を簡潔に言い表したものであるが、たしかにイザヤ書研究はこれが定説となって広く受け入れられ、現在にいたるまで第一イザヤ書研究、第二イザヤ書研究、第三イザヤ書研究という仕方で展開されてきている。²⁾ 注解書も同様に、イザヤ書全体の注解書というよりはむしろ1－39章の注解書、40－55(または40－66)章の注解書、56－66章の注解書という形を取り、これらの部分を同じ注解書のシリーズであっても異なる研究者が担当する場合が多い。エレミヤ書やエゼキエル書の場合、このようなことはほとんどない。³⁾

イザヤ書が元来独立していた三つの部分から成り立っているとしても、それらがなぜ、どのような理由で結合されるにいたったのかということについ

ては、不思議なことにほとんど関心が寄せられてこなかった。このことは、これら三つの部分が偶然に(明確な理由なしに)結合されて現在のイザヤ書となったという暗黙の理解を示していると思われるが、その背景となっていたのは、テキストの著者をその編集者よりも重要なものと見なす「真正性」についての考えにはかならなかった。つまり、預言者イザヤが語ったオリジナルな言葉をテキスト化した歴史的段階がイザヤに近ければ近いほど真正性が保たれており、イザヤから遠くなればなるほど変形されてしまったはずであるという伝承理解が無意識のうちに前提とされていたと思われる。しかしこのような伝承理解は、いわゆる伝承史・編集史的研究がすすむにつれて影をひそめるにいたった。⁴⁾

最近、元来独立していた三つの部分がなぜ結合されて現在のイザヤ書となったのかという問題が急速に研究者の関心を集めてきている。この問題は、イザヤ書が三つに区分されるとする前提があって初めて成立するわけであるから、各部分の分析が一段落したことを意味しているのかも知れないし、あるいはまた各部分の分析が進むにつれて、イザヤ書全体を再度考察する必要性が生じたのかも知れない。加えてテキストの全体性に対する関心が、20年ほど前から聖書学の領域においても顕著になってきた新批評(New Criticism)や構造主義の影響によってたかまってきたことも忘れてはならないだろう。

最近のイザヤ書全体への関心は、Brevard S. Childs (1979) や Peter R. Ackroyd (1978) の研究にまでさかのぼることができると言われている。⁵⁾ けれども、これら二人の研究の前に発表された Roy F. Melugin の『The Formation of Isaiah 40-55』(1976) も決して見逃してはならないであろう。彼が第二イザヤ書(40-55章)の分析を通して明らかにしようとしたのは、第二イザヤ書をイザヤ書のコンテキストの中に置いた編集者が元来第二イザヤ書それ自体の持っていた意図にまったく興味を示さず、彼自身の意図のために紀元前6世紀の歴史的背景を指し示すものを削除してしまったということであるが、Melugin はそのことから逆に、第二イザヤ書とイザヤ書全体との神学的関係の重要性を改めてわれわれに認識させようとしたのである。⁶⁾

もちろん、これらの研究の後も最近にいたるまでイザヤ書全体を分析対象とした研究、つまり統一体としてのイザヤ書を論じた研究は数多く発表されているのであるが、⁷⁾それらすべてをここで取り上げて論述することは不可能である。そこでわれわれは、イザヤ書研究の最近の主な傾向を追跡することによって、統一体としてのイザヤ書という理解の重要性を明らかにし、これまでイザヤ書研究に大きな影響を及ぼしてきた定説の再検討を促すことを試みたい。

しかしその前に、イザヤ書仮説が定説化するうえで大きな役割を果たした Bernhard Duhm のイザヤ書注解書⁸⁾を取り上げ、検討を加えておくことにしたい。というのは、彼のイザヤ書に関する見解がこれまであまりにも無批判に各種の分析の際に前提として用いられてきた場合が多かったと思われるからである。そのうえで、編集上の統一体としてのイザヤ書とイザヤ書の形成過程を論じ、最近のイザヤ書研究に見られる「正典」概念に言及することにしたい。

Ⅱ. イザヤ書仮説

1. Duhm のイザヤ書注解書

Duhm のイザヤ書注解書(1892)以前、すでに40章以下をエルサレムのイザヤではなく、紀元前6世紀の著者のものだとする考えがあり、研究者たちはこの著者、つまり第二イザヤをバビロンにいた預言者と見なしていた。⁹⁾こうした主張の根拠となったのは次の三点である。

- 1) 40章以下の歴史的背景は捕囚期を反映している。
- 2) 二つの部分の間の言語、文体、考えの著しい違いは異なる著者の存在を指し示している。
- 3) 紀元前8世紀の預言者が150年ほど後の捕囚の人々に語ったとするケースは旧約聖書の中では他に見当たらない。¹⁰⁾

実際、44章28節と45章1節で言及されているペルシア帝国の王キュロスが活躍した時代と1章1節にあるイザヤの活動した時代、つまり「ユダの王、

ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの治世」との時間的隔たりから、イザヤ書全体が預言者イザヤによるものであると考えるのは無理である。

こうした考えをさらに強力に推し進めたのが Duhm である。彼によれば、歴代誌歴史家は紀元前 3 世紀に、キュロスが神殿を建てさせるであろうという第二イザヤの約束(イザヤ書44章28節)をエレミヤの言葉として引用している(歴代誌下36章22-23節;エズラ記1章1-4節)。つまり歴代誌歴史家はイザヤ書40-66章あるいはその一部分を間違えてエレミヤのものと見なしていたわけである。このことから、Duhm は40-66章が当時イザヤ書の一部ではなかったと結論する。つまり、この部分はその前の章から独立していたのである。¹¹⁾

40-66章それ自体は歴代誌歴史家の時代にすでにまとまっていたと Duhm は考える。彼によれば、これらの章の中に三人の著者を見つけ出すことができるという。最も古いのは、後代の挿入部分を取り除いた40-55章の著者である第二イザヤであり、紀元前540年頃、場所はレバノンのどこか、恐らくはフェニキアである。次に来るのが「主の僕の歌」(42章1-4節、49章1-6節、50章4-9節、52章13節-53章12節)の著者である。56-66章は形態と内容から一人の著者の作品であり、ネヘミヤの活動の少し前、エルサレムにおいて書かれたものであり、Duhm はこの著者を第三イザヤと呼んだ。¹²⁾すでに述べたように、Duhm 以前、イザヤ書を1-39章と40章以下に二分する考えがあったのであるから、彼の独創的な主張は、56-66章の取り扱いと「主の僕の歌」を第二イザヤから切り離したことにある。

さて、Duhm によれば、40-66章は40-48、49-57、58-66章の三つの部分に区分できる。というのは、57章の最後の節(21節:「神に逆らう者に平和はないとわたしの神は言われる。」)がそっくりそのまま48章の最後(22節)に使われているからである。40-66章の編集者は、三つの部分がお互いに関係し合っていることを強調するために、第一の部分に第二、第三の部分と同じような締めくくりを与えた、と Duhm は考える。44章、46章、48章、50章10-11節などにいろいろな付加を行ったと思われるこの編集者は、第三イザヤと少しばかりの同質性を示すが、多分同一人物ではない。¹³⁾

ここで注意したいのは、40-60章全体にわたり編集者の手が増えられていると Duhm が主張していることである。したがって、多くの研究者が行っているように、最初から56-66章を40-55章から切り離して分析作業をすすめていくことには問題があると言わざるを得ない。つまり、一般にイザヤ書仮説と呼ばれるものは Duhm の見解を必ずしも正確に反映してはいないのである。このことは第二イザヤの活動地についても言える。というのは、Duhm 以降の研究者たちは多くの場合、彼の主張を取り入れず、彼以前の研究者たちと同じように、第二イザヤを捕囚地で活動した預言者と見なしているからである。

次に1-39章に関する Duhm の見解を見てみよう。彼は歴代誌歴史家の時代、1-39章はまだ現在の形態になってはいなかったと述べている。歴代誌歴史家はイザヤ書36-39章からの資料を使っているが、それをイザヤ書からではなく、列王記から引用している(歴代誌下32章32節参照)。もし可能であったなら、歴代誌歴史家は資料としてイザヤ書の名を挙げていただろうと Duhm は推測する。というのは、歴代誌歴史家はサムエル記や列王記ばかりに依拠することに躊躇をおぼえていたからである。さらに、歴代誌歴史家の時代、1-35章も現在の形態にはなかった。それは十中八九、36-39章を持って来た人物が1-35章をまとめたと考えられるからである。けれども、その時点において1-39章が現在と同じ形態であったかどうか定かではない。¹⁴⁾

1-35章は三つの部分、1-12、13-23、24-35章に区分できる。Duhm は、各々の背後に固有の成立過程があると考えられるこれら三つの部分の順番は偶然ではないと言う。1-12章はユダとエルサレムに関するイザヤの「幻」、13-23章は諸外国の民に対する託宣、そして24-35章は本質的には終末論的な性格を持っている。こうした配列はエレミヤ書(LXX)、特にはっきりとエゼキエル書に見いだされる。Duhm によれば、こうした構造を最初に作り出したのはエゼキエルであり、1-35章の三つの部分を現在の形に配置した人物はエゼキエルのやり方をまねたのである。こうした構造を持つ1-35章に36-39章が付け加えられたわけだが、それにも意味があり、歴史記述である36-39章はここで結論として機能しているのである。そしてじつはこれと

じ機能をエレミヤ書の最終章(52章)が持っているのである。¹⁵⁾ここで重要なことは、36－39章を現在の場所に置いた編集者は、40－66章を加えることを意図していなかったということである。¹⁶⁾

Duhm はこのようにしてイザヤ書を次のような三段階を経て成立したものと結論づけている。第1段階は、1－12章と13－23章の収集。第2段階は、三つのグループである1章以下、13章以下、24章以下の結合と歴史記述である36－39章によるそれらの締めくくり。第3段階として、40－66章の接合。¹⁷⁾ここで見逃してはならないのは、Christopher R. Seitz が Duhm の重要な見解としてまとめているように、第一イザヤ書は最終的な文学形態において、エレミヤ書(LXX)やエゼキエル書のように一つの閉じた集合体であったということと、¹⁸⁾40－66章は1－39章が最終的な形態を獲得するまで完全に独立しており、これら二つの主要部分は紀元の初めまでお互いに切り離されたままであったということである。¹⁹⁾そしてじつはこの考えが、その後のイザヤ書研究を1－39章と40－66章に区分して、それぞれを独立した分析対象とする前提となったのである。

2. Duhm の見解の問題点

さて、イザヤ書仮説、あるいは Duhm の見解に対する最も強力な反論は、イザヤ書が編集上の統一体であることの根拠を提示することであるが、それは後で取り扱うことにして、ここではまず Duhm の見解それ自体が抱えている問題点にふれておきたい。

彼は、歴代誌歴史家が紀元前3世紀に、キュロスが神殿を建てさせるであろうという第二イザヤの約束をエレミヤの言葉として引用しているので、40－66章が当時イザヤ書の一部ではなかったと結論づけた。けれども、こうした約束は、はたして第二イザヤだけに限られるものなのだろうか。例えば、エレミヤ書29章10節に次のように記されている。

主はこう言われる。バビロンに七十年の時が満ちたなら、わたしはあなたたちを顧みる。わたしは恵みの約束を果たし、あなたたちをこの地に連れ戻す。

この節には神殿再建が述べられてはいないが、ここでの約束が神殿再建という具体的な約束をも含んでいると解釈することは不可能であろうか。²⁰⁾この点に関しては、Duhm が言及した歴代誌下36章22-23節の前節(21節)にはエレミヤの約束(七十年への言及)が正しく「主がエレミヤの口を通して告げられた言葉」として紹介されていることに注意すべきである。それゆえ、Duhm の主張は十分説得力があるとは言えないのではないだろうか。

また、歴代誌歴史家はイザヤ書36-39章からの資料を使っているが、それをイザヤ書からではなく、列王記から引用したので、歴代誌歴史家の時代、イザヤ書1-39章はまだ現在の形態にはなかったと Duhm は判断した。しかしながら、列王記から引用したと決定することはできない。彼の主張の基礎となる「ユダとイスラエルの列王の書」への言及の前に「預言者、アモツの子イザヤの見た幻」と記されているからである。つまり、歴代誌下32章32節は次のようになっている。

ヒゼキヤの他の事績および敬神の行為の数々は、『預言者、アモツの子イザヤの見た幻』と『ユダとイスラエルの列王の書』に記されている。

したがって、歴代誌歴史家はイザヤ書から引用したとする逆の主張も可能である。²¹⁾このようにして考えてみると、Duhm の考えるイザヤ書の成立史は再考の必要があると言わざるを得ない。²²⁾

Ⅲ. 編集上の統一体としてのイザヤ書

イザヤ書は1-39章、40-55章、56-66章の三つに分けられ、各々の部分の一つのまとまりをなしているとする仮説に対する最も強力な反論は、イザヤ書が編集上の統一体(a redactional unity)を示しているとする考えである。これを支える根拠は次の五つにまとめられる。²³⁾

- 1) 「諸外国に対する託宣」(13-23章)の冒頭に紀元前6世紀以前のコンテクトでは不適當と思われる「バビロンに対する託宣」(13章1節-14章23節)が置かれている。バビロンは40-55章における関心の中心なので、この託宣は1-39章と40章以下を主題的につなげる働きをし

ている。

- 2) 36-39章には40章以下を導く機能がある。というのは、39章にあるバビロン捕囚の告知(特に6-7節)は40章以下の預言のためのコンテクストを提供するからである。²⁴⁾つまり、36-39章は、Duhm が36-39章を1-39章の締めくくりとして捉えたのとはまったく異なる機能を持っているのである。
- 3) 36-39章と同じように、35章にはその前の章から40章以下への移行をスムーズにさせる働きがある。なぜなら、35章に述べられている荒れ野の変容とシオンへの帰還のための道は40章でも言及されているし、35章より前の章に現われ、40章以下でも再び取り上げられているテーマ、例えば出エジプトのモチーフや「目の見えない人」と「耳の聞こえない人」のテーマなどが35章に使われているからである。²⁵⁾
- 4) 審判と救済のテーマを持つ1章は1-39章だけでなく、イザヤ書全体の導入部として機能している。²⁶⁾また、1章と65-66章の間には主題的なつながりと語彙の一致があり、イザヤ書全体においてインクルージオを形作っている。これによりイザヤ書全体が結合されているのである。²⁷⁾それゆえ、65-66章はイザヤ書全体の結びであると考えられる。
- 5) 1-39章の構造や内容には、捕囚後のユダヤ教の関心、特にエルサレムの崩壊、バビロン捕囚、捕囚後の回復を理解しようとする関心が反映している。²⁸⁾さらに、1-39章は40-66章を予期する仕方²⁹⁾で示されており、後者は前者を前提としている。特に、40章以下で言及される「初めのこと」は1-39章の預言を指し示している。

以上の根拠は、イザヤ書を1-39章と40-66章、あるいは1-39章、40-55章、56-66章に区分し、各々を他から切り離して分析の対象とすることの問題性をはっきりと示している。つまり、まず最初にイザヤ書全体が考察されなければならないのである。

IV. イザヤ書の形成過程

イザヤ書が編集上の統一体であるとするなら、イザヤ書はどのような形成過程を経てきたのだろうか。最初に Rolf Rendtorff がイザヤ書全体を理解する上で最も重要な貢献の一つであるとする Odil Hannes Steck の研究を取り上げたい。彼は35章に注目し、この章は、元来お互いから独立し、すでに文書として固定されていた二つの書を結合するテキストとして形作られたという。つまり、35章は直接隣り合う32-34章と40章1-11節の本文、文体、それにテーマの並べ方に言及することによって、第一イザヤの言葉の複合体(1-34*章)と第二イザヤの言葉の複合体(40-62*章)との間の接合部として機能しているのである。³¹⁾これにより、1-62*章は神の民の過去、現在、未来についての預言者によるまとまった説明として理解される新たな観点を獲得したわけである。³²⁾

Steck の見解を Rendtorff は高く評価するが、彼自身はイザヤ書の形成過程に関して異なる主張をしている。Steck は35章をイザヤ書の編集を理解する上での鍵となるテキストとしたが、Rendtorff は56章1節を取り上げる。イザヤ書の中の異なる箇所に見られる特徴的なトピックやテーマに関心を寄せる彼は、特に zedeq/zedaqa という語の使用に注目する。この語は1-39章においてしばしば mišpat という語と関連して人間の行為を意味し、こうした組み合わせは YHWH との関連でも現われる。³³⁾けれども、40-55章では zedeq/zedaqa が yeša' /yešu' a/tešu' a との組み合わせで YHWH の働きのために使われている。³⁵⁾以上の二つの組み合わせが56-66章の冒頭(1節)で結合されていることから、Rendtorff はこの節がイザヤ書全体の構成における鍵となる箇所と考え、56-66章は1-39章と40-55章の主題と語を結び付けていると結論する。このことは56-66章が元来独立した集合体として存在し、後になって1-39章と40-55章に付け加えられたということを意味しない。つまり、56-66章の起源はイザヤ書全体の構成との関連で考えられなければならないのである。また、1-39章の中の多くの箇所が40-55章を反映していることから、1-39章の現在の構成もイザヤ書全体の構成から離れて理解さ

れることはできないと Rendtorff は主張する。さらに、40-55章はよく計画され、まとまった構成を示しているので、元来独立して存在していたかもしれないという。つまり、40-55章はイザヤ書の構成上の核というわけである。³⁶⁾ Rendtorff の見解の中で重要なのは、イザヤ書は三つの部分(1-39、40-55、56-66章)に区分できるが、各部分すべてが他の部分から独立して存在していたのではないということ、それに形成過程の始まりは40-55章に求められるということであり、Steck との違いは明瞭である。

さらに、1-39章と40-55章の関係に関して Rendtorff と異なる主張をするのは、Ronald E. Clements である。彼は、40-55章が1-39章の中のエルサレムのイザヤの預言とどのような関係があるのかを問い、この関係について次の三つの可能性を提示する。1) 40-55章の著者はイザヤ、並びに彼の預言とまったく関係なく、後になって筆記者(scribe)が何らかの理由で結び付けた。2) 筆記者が40-55章をイザヤの預言の続きとして著しく適当であると認識した。3) 40-55章は最初からイザヤの預言を展開し、敷衍することを意図していた。Clements は、40-55章の起源に関しては、これらのうち第三の可能性がもっともたかいと判断し、実際にそれを支える根拠として、イザヤの預言の集合体の中の多くの主題(特に重要なのはイスラエルの目が見えないことと耳が聞こえないこと、それに神によるイスラエルの選びの二つ)が40-55章で展開されていることを指摘する。このように、40-55章は1-39章への補足であり続きである(a supplement and sequel)とする Clements の主張と Rendtorff の主張との違いは明瞭である。³⁷⁾

その違いはどこから来るのか。それは分析の出発点に求められるかもしれない。例えば、Rendtorff の結論は彼の分析の前提に大きく左右されているように思われる。つまり、彼は1-39、40-55、56-66章の間の関連を認識する最も良い方法はイザヤ書のまん中に位置する40-55章から始めることであると述べているからである。³⁸⁾ また、Clements が56-66章を考察の対象とはしていないことも重要な要因であろう。

ところで、イザヤ書全体の形成過程に関する研究者の立場を Rendtorff は次の二つに大きく分ける。

1) イザヤ書の最終形態は元来独立していた二つ(1-39章と40-66章)、あるいは三つ(1-39章、40-55章、56-66章)の部分が一度あるいは複数にわたる編集によって結合された結果である。

2) 各々の部分が元来独立して存在していたとは考えられない。

彼は Steck と Clements の名前を第1の立場にある研究者として挙げている³⁹⁾。たしかに Steck の場合はそうであろう。だが、Clements は40-55章が最初からイザヤの預言を展開し、敷衍することを意図していたと主張しているわけであるから、第1の立場とすることには問題がある。いずれにせよ、こうした二つの立場に分類するだけではイザヤ書全体の形成過程に関する研究者の見解を十分に整理することはできないであろう。ところで、Rendtorff は第2の立場にある研究者として Seitz の名前を挙げている。次に彼の見解を見てみよう。

Seitz はイザヤ書が三つの独立した集合体からなるという考えに反論するために次の三つの根拠を提示する。1) イザヤ書全体に対して一つの表題しかない(1章1節)。2) イザヤ書には召命記事が一つしかない。40章にいわゆる第二イザヤの召命記事があるとされるが、それは正しくない。まして、第三イザヤの召命記事はどこにも見いだせない。3) イザヤ書の中にははっきりとした境界が記されていない。39章から40章に移る時、われわれは新しい調子に出会うが、55章から56章への移行よりもいわゆる第一イザヤ書の中にあるいくつかの移行、例えば、12章から13-24章の諸外国に対しての託宣への移行などの方が明瞭である。⁴¹⁾

三つの集合体が元来独立していたことを示すしるしは、それらが一つになった時に省かれたと論じられてきているが、これは決して明らかなことではないと Seitz は言う。そもそも、40-55章は高度に構造化された構成を持っており、召命記事あるいは表題が失われたとする証拠はないし、56-66章は独立していたものとして見られることに抵抗してきたのである。⁴²⁾ 加えて、40-48章で言及されている「初めのこと」は1-39章にあるアッシリアの時代に語られた審判の言葉であり、また、40-55章の「僕」(単数)が56-66章で取り上げられ、「僕ら」(複数)となっている。こうしたつながりは三つの独

立していた集合体が一つとなった時に加えられたものではないと Seitz は考える。⁴³⁾

さらに Seitz は、『Zion's Final Destiny』(1991)と題した著作の中で、36-39章に注目する。というのは、彼は36-39章を正しく評価することが第二イザヤ書の第一イザヤ書への関係とイザヤ書全体の原理を理解する上で重要である⁴⁴⁾と考えるからである。すでに述べた Duhm の見解における36-39章の重要性を思い起こすならば、36-39章に関する新たな理解は直ちに Duhm の見解およびイザヤ書仮説批判となる。例えば、Seitz は36-37章とそれに対応する列王記下18章13節-19章37節を詳細に分析し、一般に受け入れられてきた見解とは異なり、列王記下の記事の方がイザヤの記事に依存しているという結論に達する。つまり、紀元前701年のエルサレムの解放と信仰のモデルとしてのヒゼキヤが描かれている36-37章はマナセの時代の初めの頃に多分ヒゼキヤと密接な関連があった集団によってイザヤ書伝承の一部として作られた、と Seitz は考えるのである。⁴⁵⁾ また彼は、40章1-11節におけるシオン/エルサレムへの関心の集中が36-38章にあるヒゼキヤ-イザヤ物語の記述を意識していることと40-55章での「初めのこと」への言及から、第二イザヤ書は最初から発展していくイザヤ書伝承の中で作られたと主張する。⁴⁶⁾ これは Clements の見解に近いものと言えよう。⁴⁷⁾ いずれにせよ、Seitz の研究は Duhm の見解およびイザヤ書仮説の批判的再検討を強力に促すものであることは確かである。

以上、イザヤ書の形成過程に関する Steck、Rendtorff、Clements、Seitz の見解について見てきたが、研究者がイザヤ書の中の何に注目し、何と関連させて考察するかによって各自の結論は大幅に異なっているのが現状である。したがって、われわれは形成過程そのものの仮説の是非を検討する前に、イザヤ書が編集上の統一体であることの根拠として提示されてきたデータの見直しをする必要があると思われる。しかし、それ以上に重要なのは、イザヤ書全体のテキストを横断する形でテキストの最小構成要素から最大単位までの各レベルにおける関連性をできるかぎり明らかにしていくことであろう。そしてそれらのデータをこれまでの第一イザヤ書、第二イザヤ書、第三イザ

ヤ書の内容と突き合せ、イザヤ書全体の形成過程に関する新たな再構成を企てるべきである。⁴⁸⁾

V. おわりに

Bernhard W. Anderson は、「イザヤ書の統一性の問題は Brevard Childs の Introduction to the Old Testament as Scripture 中の正典論的アプローチによって再開された」と述べた。⁴⁹⁾ たしかに Childs はその著書の中で「イザヤ書の正典論的形態」について論じており、⁵⁰⁾ 最近でも、彼のイザヤ書研究へのアプローチは、たとえば Seitz によって Canonical Critical と呼ばれ、注目をあびている。⁵¹⁾ この場合、Canonical とは、Seitz によれば、現在の信仰の共同体の「聖典」としてイザヤ書を解釈するためのコンテキストを提供し、同時にその解釈を枠付ける役割を強調しているのであるが、さらにイザヤ書の最終形態の意図は歴史批評学的分析によって明らかにされてきたテキストのいろいろな意図の総計以上のものであるということの意味しているという。⁵²⁾ 同時に Critical という表現を用いて、歴史批評学的分析を無視するのではないことを意味しているが、重点はあくまでも Canonical という表現にある。というのは、彼によれば、イザヤ書の66章全体にわたって「神の言葉」を聞く助けとして備えられたいくつかの重要な内的特徴を歴史批評学的分析はいまいにする恐れがあるからである。⁵³⁾

しかし、このような「正典」概念をイザヤ書研究に直接導入することについては、当然のことながら異論がある。たとえば、Clements は「正典化」の過程はイザヤ書が現在の形態をとるにいたった直接の理由とは何らの関係もなかったはずであると言う。つまり、現在のイザヤ書を形作った人々の意図とそれを「正典」とした人々の意図とを全く同じものであると見なすことはできないし、見なすべきではないと主張するのである。Clements によれば、われわれが取り組んでいる問題は「編集批判」に関わる文学的、神学的問題であって、正典論的アプローチのそれではないのである。⁵⁴⁾

もちろん、イザヤ書の最終形態を最終形態として確定したとき「正典」

とされたときの役割を考えるならば、編集批判と正典論的アプローチとを全く切り離してしまうことはできないであろう。イザヤ書全体の形成を伝承化の過程として捉えるならば、この過程の終着点が正典の段階となり、正典という概念をそれ以前の過程と結び付けることも可能になるからである。⁵⁵⁾

とは言え、「正典」概念を安易に導入することは問題の解決になるどころか、かえって問題を複雑にしてしまう恐れがある。⁵⁶⁾ われわれはあくまでも伝承されたテキストそのものの構造の解明とそれにもとづいた解釈を試みるべきであろう。その作業の展開はあらためて別の機会にゆずりたいと思う。

注

この小論は、拙論「第二イザヤ書(イザヤ書40-55章)研究史概観」『基督教研究』、第54巻第1号(1992年12月)、26-54頁の続きとなるものである。

欧文の文献に関する略号は、“Instructions for Contributors,” *Journal of Biblical Literature* 107(1988): 579-596の中にある略語表に従う。聖書の日本語訳は『新共同訳』(日本聖書協会、1987年)による。

- 1) R. J. Clifford, *Fair Spoken and Persuading: An Interpretation of Second Isaiah* (New York/Ramsey/Toronto: Paulist Press, 1984), p.3.
- 2) 最近発表された N. K. Gottwald, “Social Class and Ideology in Isaiah 40-55: An Eagletonian Reading,” *Semeia* 59(1992): 43-57 でもこの仮説が分析の前提となっている。
- 3) エレミヤ書は大きく三つの層に区分できるが、それらは混ぜ合わせられており、第一エレミヤ書、第二エレミヤ書、第三エレミヤ書とはならない(C. R. Seitz, “Isaiah 1-66: Making Sense of the Whole,” C. R. Seitz [ed.], *Reading and Preaching the Book of Isaiah* [Philadelphia: Fortress Press, 1988], pp.119-120)。ちなみに、Robert P. Carroll は注解書の中で、エレミヤ書は捕囚前の預言者であるエレミヤとはほとんど関係がないと主張している(*Jeremiah: A Commentary, OTL* [London: SCM Press, 1986])。
- 4) 旧約学の研究史上、編集者の重要性を明らかにしたものとしては、ヤハウィストに関する Gerhard von Rad の研究(荒井章三訳『旧約聖書の様式史的研究』[日本基督教団出版局、1969年])と申命記史家に関する Martin Noth の研究(*Ueberlieferungs-geschichtliche Studien: Die sammelnden und bearbeitenden Geschichtswerke im Alten Testament* [Tuebingen: Max Niemeyer Verlag, 1943]) が挙げられるだろう。
- 5) R. Rendtorff, “The Book of Isaiah: A Complex Unity: Synchronic and Diachronic

Reading," SBLSP 30 (1991): 8. ここでの研究とは、B. S. Childs, *Introduction to the Old Testament as Scripture* (Philadelphia: Fortress Press, 1979) と P. R. Ackroyd, "Isaiah I-XII: Presentation of a Prophet," *Congress Volume*, Goettingen 1977, VTSup 29 (Leiden: Brill, 1978), pp.16-48 である。Anthony J. Tomasino ("Isaiah 1.1-2.4 and 63-66, and the Composition of the Isaianic Corpus," JSOT 57 [1993]: 81, n.1) は、ずっと以前から研究者たちはなぜイザヤ書という形にまとめられたのかを問うてきたと指摘するが、この問いはイザヤ書の著者問題と深く関わっており、現在のイザヤ書全体への関心とは性質上異なっている。

- 6) R. F. Melugin, *The Formation of Isaiah 40-55*, BZAW 141 (Berlin/New York: Walter de Gruyter, 1976), pp.176-177. 彼の研究は拙論「第二イザヤ書(イザヤ書40-55章)研究史概観」、42-45頁にまとめてある。そこでも述べたが、Meluginは、第二イザヤ書は紀元前6世紀の捕囚期というコンテクストではなく、それが置かれているイザヤ書のコンテクストの中で解釈されるべきであるとする Childs の主張を紹介しているが、彼からの影響を否定している。けれども、Childs はイェール大学での Melugin の先生であったことをここで付け加えておくべきであろう (Melugin, *The Formation* の序文を見よ)。
- 7) Rendtorff, "The Book of Isaiah," pp.18-20 の文献表や D. Car, "Reaching for Unity in Isaiah," JSOT 57 (1993): 61-80の注を見よ。
- 8) B. Duhm, *Das Buch Jesaia*, HKAT 3.1 (Goettingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1892).
- 9) C. R. Seitz, *Zion's Final Destiny: The Development of the Book of Isaiah: A Re-assessment of Isaiah 36-39* (Minneapolis: Fortress Press, 1991), p.11, n.28.
- 10) Childs, *Introduction*, pp.316-317.
- 11) Duhm, *Das Buch Jesaia*, p. VII; Seitz, *Zion's Final Destiny*, pp.4-5. 歴代誌上3章にあるダビデ家の系図は歴代誌の著作年代は紀元前4世紀以降であったことを示唆する(石田友雄著「第4章 歴史文学」、『総説 旧約聖書』[日本基督教団出版局、1984年]、311頁)。
- 12) Duhm, *Das Buch Jesaia*, pp.VIII-XIV. 彼は第二イザヤの活動場所を「多分、北フェニキア」とも述べている(p.XVIII)。ここで注意すべきは、バビロンが活動場所でないことである。
- 13) Duhm, *Das Buch Jesaia*, pp.XIII-XIV. 彼はこの編集者が56-60章と61-66章を置き換えたのではないかと推測している(p.XIV)。つまり、元来は61-66章が56-60章の前にあったというわけである。また、後代においても40-66章にいろいろな種類の小さな付加が行われた(ibid.)。
- 14) Duhm, *Das Buch Jesaia*, p.VII; Seitz, *Zion's Final Destiny*, p.5.
- 15) Duhm, *Das Buch Jesaia*, pp.VII-VIII, XIII; Seitz, *Zion's Final Destiny*, p.3.
- 16) Duhm, *Das Buch Jesaia*, p.XIII.
- 17) Duhm, *Das Buch Jesaia*, p.VIII. 彼は成立過程はもっと複雑であったかもしれない

- と述べている (ibid.)。1-39章が現在の形態に至るまでの複雑な過程は Duhm によって指摘されているが、1-39章の成立過程に関する最近の研究として、H. Barth, *Die Jesaja-Worte in der Josiazeit: Israel und Assur als Thema einer produktiven Neuinterpretation der Jesajasueberlieferung*, WMANT 48 (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener, 1977); J. Vermeylen, *Du prophète Isaïe à l'apocalyptic*, 2 vols (Paris: Gabalda, 1977-1978); O. Kaiser, *Isaiah 13-39: A Commentary*, R. A. Wilson (tr.), OTL (London: SCM, 1974); *Isaiah 1-12: A Commentary*, J. Bowden (tr.), OTL, Second Edition (Philadelphia: Westminster, 1983); H. Wildberger, *Jesaja 28-39*, BKAT X/3 (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener, 1982), pp.152ff. がある。例えば、Vermeylen は 1-35章の形成における 7つの編集段階の意図を論じている。こうした研究において、1-39章が40-66章から独立した一つのまとまりとして論じられていることに注意すべきである (M. A. Sweeney, *Isaiah 1-4 and the Post-Exilic Understanding of the Isaianic Tradition*, BZAW 171 [Berlin/New York: Walter de Gruyter, 1988], p.3)。
- 18) Seitz, *Zion's Final Destiny*, p.3.
 - 19) Seitz, *Zion's Final Destiny*, p.4.
 - 20) R. Smend, *Die Entstehung des Alten Testament* (Stuttgart: W. Kohlhammer, 1978), p.144. Smend への言及は Seitz, *Zion's Final Destiny*, p.5, n.10による。
 - 21) K. A. D. Smelik, "Distortion of Old Testament Prophecy: The Purpose of Isaiah xxxvi and xxxvii," OTS 24 (1989): 86, n.1. Smelik への言及は Seitz, *Zion's Final Destiny*, p.5, n.11による。
 - 22) シラ書(集会の書)48章22-25節には次のように書かれている。「ヒゼキヤは主の御旨を行い、先祖ダビデの道を堅く守った。それは預言者イザヤが命じた道であった。イザヤは偉大で、受けた啓示に忠実であった。太陽が後戻りして王の寿命が延ばされたのは、イザヤの時代であった。イザヤは大なる霊によって終末の時を見つめ、嘆き悲しむシオンの人々を励ました。彼は永遠に及ぶ未来の事、隠された事実を、それが起こる前に示した。」この箇所の内容はイザヤ書40-66章をイザヤのものに見なしており、かつまた、36-39章がすでに結び付いていることを前提としていえると考えられる。つまり、シラ書の箇所が作られた時、すでに40-66章は1-39章と結合していたと推測できる。けれども、この箇所が実際にシラ(紀元前2世紀)によるものかどうか決して確かではないという理由から、Duhm は十分な証明材料とはならないと判断する。ここには1-39章と40-66章との結合をもっと後の時代に設定しようとする彼の意図があるように思われる。
 - 23) ここでは Sweeney, *Isaiah 1-4*, pp.11-25を資料とした。彼によれば、イザヤ書全体は「エルサレム/ユダの人々に彼らの神である YHWH へと帰れとの勧め」(p.98)であり、紀元前5世紀後半のユダヤ人共同体が抱えていた諸問題への一つの回答なのである。
 - 24) P. R. Ackroyd, "An Interpretation of the Babylonian Exile," SJT 27 (1974): 349;

"Isaiah 36-39: Structure and Function," W. C. Delsman, J. T. Nelis, J. R. T. M. Peters, W. H. Ph. Romer, and A. S. van der Woude (eds.), *Von Kanaan bis Kerala: Festschrift fuer Prof. Mag. Dr. J. P. M. van der Ploeg, O.P. zur Vollendung des siebzigsten Lebensjahres am 4. Juli 1979*, AOAT 211 (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener, 1982), pp.3ff.

36-39章とそれに対応する列王記下18章13節-20章19節はいろいろな箇所で見られている。特にイザヤ書38章9-20節には列王記下にはない「ヒゼキヤの記した歌、ミクタブ」(38章9節)が挿入されている。二つのテキストを比較することによって、イザヤ書36-39章にはヒゼキヤを理想的な人物(信仰深い)として描こうとする意図があることが明らかとなる。こうした描写は同じ歴史物語であるイザヤ書6章1節-9章6節の中でのユダの王アハズの描写と著しい対照をなしている。36-39章に表現されているヒゼキヤの信仰は後の共同体にとっての信仰のモデルとして機能したように思われる。加えて、36-39章ではヤハウエの応答のすばやさも強調されている。

- 25) イザヤ書における35章の機能は次の章でも論じられる。40-55章における出エジプトのテーマに関しては、B. W. Anderson, "Exodus Typology in Second Isaiah," B. W. Anderson and W. Harrelson (eds.), *Israel's Prophetic Heritage: Essays in Honor of James Muilenburg* (New York: Harper & Brothers, 1962), pp.177-195; "Exodus and Covenant in Second Isaiah," F. M. Cross, W. E. Lemke, and P. D. Miller (eds.), *Magnalia dei: The Mighty Acts of God* (Garden City, NY: Doubleday & Co., 1976), pp.339-360; K. Kiesow, *Exodustexte im Jesajabuch: Literarkritische und Motivgeschichtliche Analysen*, OBO 24 (Goettingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1979)を見よ。
- 26) G. Fohrer, "Jesaja 1 als Zusammenfassung der Verkuendigung Jesajas," ZAW 74 (1962): 251-268; J. Becker, *Isaias-Der Prophet und sein Buch*, SBS 30 (Stuttgart: Katholisches Bibelwerk, 1968), pp.45ff. 特に1章29-31節に関しては、Sweeney, *Isaiah 1-4*, pp.23-24を見よ。
- 27) L. J. Liebreich, "The Compilation of the Book of Isaiah," JQR 46 (1955-56): 276-277; JQR 47 (1956-57): 126-127; R. Lack, *La symbolique du livre d'Isaie: Essai sur l'image littéraire comme élément de structuration*, AnBib 59 (Rome: Biblical Institute, 1973), 139ff. Tomasinoによれば("Isaiah 1.1-2.4 and 63-66," pp.81-98)、63-66章は1章2節-2章4節にならって計画的に作られた。
- 28) D. R. Jones, "The Tradition of the Oracles of Isaiah of Jerusalem," ZAW 26 (1955): 226ff.; Ackroyd, "Isaiah I-XII," pp.16ff.; R. E. Clements, "The Prophecies of Isaiah and the Fall of Jerusalem in 587 B.C.," VT 30 (1980): 421ff.
- 29) Childs, *Introduction*, pp.325ff.; Clements, "The Unity of the Book of Isaiah," Int 36 (1982): 117ff.
- 30) Rendtorff, "The Book of Isaiah," p.17.

- 31) *は言及されているテキストがまだその最終形態にはないことを意味する。
- 32) O. H. Steck, *Bereitete Heimkehr: Jesaja 35 als redaktionelle Bruecke zwischen dem Ersten und Zweiten Jesaja*, SBS 121 (Stuttgart: Katholisches Biblewerk, 1985), p.101. 35章が形作られた時、40-55*章はすでに40-62*章へと拡張されていた(ibid.). Clementsは35章を40-55*章の預言の主な内容の要約と考える("The Unity of the Book of Isaiah," p.121)。
- Steck は一人の預言者あるいは著者としての「第三イザヤ」の存在を否定する。すなわち、56-66章は独立して存在していた集合体ではなく、40-55章あるいは1-39章の大部分と40-55章からなるより大きな集合体(Steck は Grossjesaja と表現する)に段階的に付け加えられたものである。O. H. Steck, "Tritojesaja im Jesaja-buch," J. Vermeylen (ed.), *The Book of Isaiah-Le Livre d'Isaie*, BETL 81 (Leuven: Peeters, 1989), pp.361-406を見よ。
- 33) 1章21、27節；5章7節；9章6節；16章5節；また1章6節；5章23節；11章4-5節；26章10節。
- 34) 5章16節；26章9節；28章17節。
- 35) 45章8節；46章13節；51章5、6、7節；šalom といっしょに48章18節；54章13-14節など。
- 36) ここでは、R. Rendtorff, *The Old Testament: An Introduction* (Philadelphia: Fortress Press, 1986), pp.199-200を使った。また、Rendtorff, "Zur Komposition des Buches Jesaja," VT 34 (1984): 295-320; "Jesaja 6 im Rahmen der Komposition des Jesaja-buches," J. Vermeylen (ed.), *The Book of Isaiah-Le Livre d'Isaie*, BETL 81 (Leuven: Peeters, 1989), pp.73-82; "Jesaja 56,1 als Schluessel fuer die Komposition des Buches Jesaja," *Kanon und Theologie: Vorarbeiten zu einer Theologie des Alten Testaments* (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener, 1991), pp.172-179をも見よ。
- 37) R. E. Clements, "Beyond Tradition-History: Deutero-Isaianic Development of First Isaiah's Themes," JSOT 31 [1985]: 95-113, esp.100-101. また、Clements, *Isaiah 1-39*, NCB (Grand Rapids/London: Eerdmans/Marshall, Morgan, and Scott, 1980); *Isaiah and the Deliverance of Jerusalem*, JSOTSup 13 (Sheffield: JSOT Press, 1980); "The Prophecies of Isaiah and the Fall of Jerusalem in 587 B.C.," pp.421-436; "The Unity of the Book of Isaiah," pp.117-129をも見よ。
- 38) Rendtorff, *The Old Testament*, p.198.
- 39) Rendtorff, "The Book of Isaiah," p.11.
- 40) もっとも Rendtorff はこの小論で使った Clements の "Beyond Tradition-History" (1985)ではなく、それ以前に発表された *Isaiah and the Deliverance of Jerusalem* (1980); "The Prophecies of Isaiah and the Fall of Jerusalem" (1980); "The Unity of the Book of Isaiah" (1982)を使用しているようだ。
- 41) Seitz, "Isaiah 1-66," p.109. 彼は他の根拠に関しては、Childs, *Introduction*, pp.325ff.; Rendtorff, *The Old Testament*, pp.198-200を見るように記している。二

- 番目の根拠については、Seitz, "The Divine Council: Temporal Transition and New Prophecy in the Book of Isaiah," JBL 109 (1990): 229-246をも見よ。
- 42) Seitz, "Isaiah 1-66," p.110. ここで Melugin の主張との違いに注意すべきである。Melugin の見解はこの小論の冒頭で説明した。
 - 43) Seitz, "Isaiah 1-66," p.110.
 - 44) Seitz, *Zion's Final Destiny*, p.35.
 - 45) 36-37章の分析は、Seitz, *Zion's Final Destiny*, pp.47-118を見よ。
 - 46) Seitz, *Zion's Final Destiny*, pp.193-208.
 - 47) ここに、J. M. Vincent, *Studien zur literarischen Eigenart und zur geistigen Heimat von Jesaja*, Kap.40-55, *Beitraege zur biblischen Exegese und Theologie* 5 (Frankfurt am Main: Peter Lang, 1977) と J. H. Eaton, *Festal Drama in Deutero-Isaiah* (London: SPCK, 1979) をも付け加えることができるかもしれない。
 - 48) 1993年度の American Academy of Religion/Society of Biblical Literature 年会の中の Formation of the Book of Isaiah Seminar で発表された C. A. Franke, "The Function of the Oracles against Babylon in the Book of Isaiah"; Seitz, "On the Question of Divisions Internal to the Book of Isaiah"; Sweeney, "On Multiple Settings in the Book of Isaiah"; G. T. Sheppard, "Isaiah as a Witness to Revelation: Pre-Theological Exposition of a Book within both Jewish and Christian Scriptures" が SBL 1993 Seminar Papers に掲載される予定である。また、H. G. Williamson がイザヤ書(全体)の注解書(新しい ICC シリーズ)を執筆中とのことである。
 - 49) B. W. Anderson, "The Apocalyptic Rendering of the Isaiah Tradition," J. Neusner, P. Borgen, E. S. Frerichs, and R. Horsley (eds.), *The Social World of Formative Christianity and Judaism* (Fs. H. C. Kee) (Philadelphia: Fortress Press, 1988), p.17, n.1. Walter Brueggemannによれば、正典論的アプローチにおける Childs のもっともはなばなしい成功はイザヤ書に関してである("Unity and Dynamic in the Isaiah Tradition," JSOT 29 [1984]: 89)。
 - 50) Childs, *Introduction*, pp.325ff.
 - 51) Seitz, "Isaiah 1-66," p.105. Childs と Klaus Baltzer が彼の先生である (Seitz, *Zion's Final Destiny* の序文を見よ)。
 - 52) Seitz, "Isaiah 1-66," p.105.
 - 53) Seitz, "Isaiah 1-66," pp.105, 107.
 - 54) Clements, "Beyond Tradition-History," p.97.
 - 55) John Barton は正典論的アプローチを編集批評の後継者として位置付ける (*Reading the Old Testament: Method in Biblical Study* [Philadelphia: Fortress, 1984], p.208)。
 - 56) Childs の正典論的アプローチへの批判としては James Barr の著作を見よ。日本語訳では、ジェームズ・バー著、宇都宮秀和訳『聖なる書物』、聖書の研究シリーズ 37 (教文館、1992年)がある。また、M. G. Brett, *Biblical Criticism in Crisis?: The Impact of the Canonical Approach on Old Testament Studies* (Cambridge: Cambridge

University Press, 1991)を参照。